

SHINC LUB 59

(株)辰 東京都渋谷区渋谷1-24-4 シブヤ百瀬ビル7F tel/03-3486-1570 fax/03-3486-1450 URL:http://www.esna.co.jp



溶接作業を行う置鮎工業の工場長

ものづくり

私たちは、イスやテーブルなどの家具には職人技を認めても、建築の個々の施工箇所の良し悪しは、なかなか判断できません。それは、施工者以外には、建築内部の構造や基礎の部分を目にする機会が少なく、不具合が出ない限り問題はないからです。しかし建物の良し悪しは確実に存在します。よく言われるのは屋根などの雨仕舞いの悪さ＝雨漏りの原因となります。冷暖房器具などの設備の設置は建物の納まりに関わってきます。水周りの処理も設備に十分な機能を発揮させるために、設置する場所の素材・形状など、準備しておくことはたくさんあります。ある部分のこだわりが過ぎたために、逆に配慮が足りないために、せつかくのデザインや建物全体の機能が台無しになるような設計だけは避けたいものです。

写真は、弊社の協力業者、金物細工の「置鮎工業」の工場長さんの溶接作業風景です(4ページ「現場最前線」参照)。取材で訪れた浦安の工場では、職人さんたちがそれぞれ黙々と作業を行っていました。鉄骨に白い線を丁寧に引いていく人、鉄板に穿孔機で穴を慎重にあけている人、…。建物をつくるために、地道な作業を行う人がそこにいます。置鮎さんの仕事は、例えば大きな現場であれば東京競馬場や明治座の座席だったり、小さなものは個人邸の螺旋階段であったりとさまざまですが、共通しているのは、完成すれば基本的には目に見えないものになるということです。竣工写真を撮っても、その仕事ぶりはどこにも見あたりません。しかし、仕事は高い精度のものを求められるのであり、手を抜いてはいけなことは職人さんが一番わかっているのです。

一方難しいことや新しいことに挑戦したいのは、ものづくりをする人にしてみれば当然のこと。それは設計者も施工者も、個々の職人さんにも言えることでしょう。時には建て主さん自身が強烈な挑戦者であることも少なくありません。「すべての人の要望をできるだけかなえてあげたい」というのは施工者の素直な気持ちです。ただ、やはり「人が一度精魂込めて作ったものを壊す」ということは、なるべくしたくないものです。「もったいない」「追加料金が発生する」ということだけでなく、「丹精込めて作った人の熱意や時を無駄にしたくない」という単純な思いからです。人の尊厳を損なう行為をしたくない、という気持ちです。ものづくりの工程をイメージできるかどうかは重要なことだと思います。平気で作った人にやり直しをさせる、それはいったい誰の責任になるのでしょうか。

最近では、建築を専門とする人だけでなく、いろいろな分野から建物作りに参画する人たちが増え、これまでの概念にとらわれない自由な発想でのビジネスが登場しています。時代の必然性かもしれませんが。特にリフォームなどではその動きが顕著です。しかし建物は簡単に建つものではありません。長年受け継がれてきた施工技術をないがしろにせず、きちんと理解した上の事業計画・設計プランが求められます。ものづくりは、「人」の経験と熱意が込められるべきものだと感じています。

C-HOUSE 新築工事



①北側全景②2階リビング③バスルーム④玄関からバスルームを臨む⑤エントランス&ガレージ⑥2階ダイニング⑦2階リビングより室内テラスを臨む。⑧3階個室。窓の外のテラスの向こうに天窗が見える。



大きな室内テラスと2つの寝室で四季が感じられる家

建て主の要望は、限定された敷地の中で可能な限りスペースを確保し、明るさのある家をとということであった。ガレージを兼ねたエントランスは、構造壁に従うとクルマ2台分のスペースが確保できないため、キャンティレバーとなった。しかし、防犯や視線の配慮から隣地との境界に設けた壁により、すぐには浮いていると気が付かない奥ゆかしい構造となっている。

1階のバスルームはガラス戸で仕切られただけのオープンなスペースで、細長い敷地に立つ建物の北側の玄関へもバスルームからの光が届く。

2階は、通常なら外部に開かれるべきテラスをリビング北側に隣接させて室内にとり込んだ大きな空間で、仕上げにタイルを貼り、天窗からの光の変化で1日の移ろいを感じられるスペースになっている。折れ戸を設けて温熱環境に配慮し、緑を置いたり、パーティスペースとして利用できるように、自由な空間を提供している。北側前面道路に対しては閉じた空間であることが光の効果をさらに際立たせている。

1階と3階の寝室は、「夏の寝室と冬の寝室」と、設計した芦原氏は言う。1階の半地下的な寝室は夏涼しく、都心の景色が見渡せる開放的な3階の寝室は冬でも暖かい。別荘感覚で両方を使いこなすことが可能であるという。

所在地: 東京都品川区
構造: RC造 地上2階
用途: 専用住宅
設計: 芦原太郎
/ 芦原太郎建築事務所

N-HOUSE 新築工事



①1階ワンルーム②2階玄関とリビングダイニング③3階リビング。ソファの色を2階と変えている。④2階キッチン⑤3階の寝室奥のトイレ・洗面とウォーキングクロゼット⑥グレーチングテラスの洗い場・物干し場

所在地: 東京都港区
構造: 木造+一部鉄骨造
地上3階
用途: 重層長屋
設計: ㈱辰一級建築士事務所

変形敷地を有効に生かした多世帯住宅

地形の起伏の大きい港区である。20坪ほどの三角形の変形敷地の家の、建て替え工事である。2階玄関は長い坂道に、1階は平坦な路地の突き当たりそれぞれ面している。施主夫妻は、長年日当たりの悪い1階にいらしたご両親のために明るく暮らしやすい居室を作ることを決意した。ユニットバスルームを擁する1階ワンルームは、新婚の息子さん夫婦に、2階をメインダイニングとし、ご両親の寝室とトイレ・洗面・バスルームを隣接させた。もちろんバリアフリーである。3階にご夫婦の個室とリビングルームを設けている。造作家具や床は落ち着いた配色とし、特にご両親の部屋の家具は、宙吊クロークにして床面積を有効に使えるようにした。また2階3階のリビングには下部に収納が付いたボックス式ソファを置いてすっきりした室内を目指している。2階奥のグレーチングのテラスは洗い場と物干しになっており、竹やぶを背負っているものの、風通しの良い空間になっている。港区でも、このあたりはまだ蛇が出るという。



芦原太郎(あしはらたろう) profile

1950年 東京都生まれ
 1974年 東京芸術大学美術学部建築科 卒業
 1976年 東京大学大学院建築学修士課程 修了
 1977年 芦原建築設計研究所 勤務
 1985年 芦原太郎建築事務所設立 代表取締役
 2003年 芦原建築設計研究所 代表に就任

F-HOUSE、白石市立白石第二小学校、シマノ本社ビルウェストウイング、西五軒町再開発計画など、個人邸から、市民参加型のワークショップ手法を設計に取り入れた公共建築まで幅広く手がける。まちづくり活動、他分野との商品開発実験などにも取り組んでおり、日本建築家協会副会長(2000-2002)、東京芸術大学講師(2001-2003)、グッドデザイン賞審査員などの社会的活動も精力的に行っている。

今月は、C-HOUSEの設計者芦原太郎さんの登場です。目黒区駒場の事務所に伺って話を聞かせていただきました。

—芦原さんは、個人住宅から公共の建物、マンションまでさまざまなお仕事をされていますね。

芦原:頼まれるといやと言えない性格だし、何でも興味を持つタイプです。目標を持って理想像を掲げてやっていく建築家もいるけど、僕は自称カメレオン建築家(笑)。個人のクライアントのために住宅を建てる場合もあれば、デベロッパーのため、つまりビジネスのため企画の実現を考えてあげることもする。市民のための公共施設もある。建築という形を使っていろいろな仕事をしています。今度デベロッパーと組んで、アパートのシステム開発をし、初めてのロイヤリティ契約をしました。

—デザイナーズマンションが一般にも浸透して、デザインの重要性が認識され始めていると感じますが、個人住宅では、「せっかく建築家の設計でRC住宅を建てたのに、買い替え時には広さと駅からの距離だけで値段が決められ、普通の木造住宅と同じ程度にしか評価されなかった」という不満を持つ建て主もいます。設計者や建物についての機能性、デザイン性、さらにそれをリノベーションする意味のある付加価値などもっと語られていいのではないかと思いますか。

芦原:ただ、僕はそれで値段を上げるという気はしないね。確かにアメリカなどでは、しっかりと経済価値に反映されているケースもある。場所や広さだけで決まるのではなく、「どういふ家か」、「設計者は誰で、持ち主は誰だったのか」とか、そういったストーリーで値段が左右される。でも、例えばバーゲンセールで100円均一の商品が並んでいて、もしその中から自分にとって価値のあるお買い得品を見つけた人がいれば、賢い目があるその人をほめてあげたいな。賢い生活者が出てくると、値段の価値も意味がある。

—つまり住宅の場合、「みんなの価値である必要はない」と思う。自分が家を買ったり作ったりするのに、「どうだ、いいだろう」とみんなから価値を認めてもらう必要はないと思わない? その辺の中古品でもいいものもあるのだし、住んでいる人が満足してくれるのが一番うれしいよね。昔の建築家というのは、王様というスポンサーがあって、国威発揚のような、一般人にわかりやすいものを提示しなくてはならないという責任もあったかもしれない。それなら僕も「時にお役に立とう」と思うこともあるけれど、住宅は違うもの。—なるほど、そうですね。

芦原:それから、建物を建てるときは、いろいろとクライアントとの間で意見交換をするでしょう。昔の設計者の先生方は、そんな時クライアントを教育した。「人類の歴史を見ろ」とか言って洗脳した上で、自分のデザインを認めさせる。それに比べたら僕らなんてできるわけない。そもそも僕なんて、クライアントは皆年上だったしね。それなりの一家言持っている偉い方なわけだから、洗脳どころの騒ぎじゃない(笑)。こちらが勉強させてもらった。だから洗脳というよりは、クライアントのためにどうしたらいいか、何を求めているのかを考えてきたわけ。だからと言ってすべてクライアントに言われたとおりに作っていたら、おかしくなることもたくさんある。そこは、建築家が説明していただけたね。

—昔、住宅の設計コンペやりましたが、模型を使ったプレゼンテーションまでやったのに、結局奥様のお父様が薦めるハウスメーカーのプランに決まってしまう、設計者の方たちに申し訳なかった経験があります。普通

の人にプランを決定させるのは酷ですね。

芦原:住宅設計の場合は、まさに「人」。クライアントも設計者といろいろやりあった上でないと、結局わからないでしょう。僕だって、突然3案出てきて、それを基に建築家を選ぶなら止めた方がいいと思う。「人」が信頼を得るわけです。「建築家に頼んだら、設計を変えられないんじゃないか」と思いがちですが、「人を選ぶんだ」ということになってあげればいいんじゃないの。

—大事なのは、なかなか建築事務所の先生と建て主を結びつける場面がないということですね。僕は今、「アートウェブハウス art web house-<http://www.artweb-house.com/index.html>」という家作りをアドバイザーとして、お手伝いをしています。建築家と家を作りたいという人の接点を作るために、青山にスタジオを構えて仲人のような立場で「建築家による家作り」を紹介しているんです。のぞいてみてください。

—公共のコンペではどういうことになりますか。コンペでの審査、協会のお仕事も多々なさっていますね。

芦原:コンペでも同様の問題はあります。「人」を選ぶのか、「案」を選ぶのか。その昔、香川県に金子知事と言う人がいて、丹下健三さんとか大江宏さんなどの建築家を登用して、特命で「君これやってくれ」「香川県の文化をつくれ」と、良いまちづくりをしようという時代があった。その当時は入札が一般的でしたが、熊本や岡山などが後に続いて、バブルの頃まで建築家の特命の工事が結構あった。最近ではプロポーザルとか、コンペというのが増えてきました。プロポーザルとは、ある条件、例えば3年間で何㎡以上設計して、こういう建物を建てたという条件に見合った人たちが、簡単に案を出すスタイルなんです。案を選ぶのか人を選ぶのかははっきりしません。コンペで最終的に1つの案を決めると、後から案を変えたくても変えられないという不自由さが出てくる。建築家本人としても変えたい、クライアントとしても変更したい、でもいったん決めてしまうと、なかなかそれができない。大勢の人の案の中から選ばれたのだからあたりまえですね。

—そこで最近、建築家協会では、QBS=資質評価制度(Qualification Base Selection)というシステムを普及させようとしています。アメリカなんかのやり方ですが、建築家をインタビューする、あるいはその人の作った作品を見る、作品を管理する人のところへ行って取材するといったことで審査する。「あの人に建ててもらってどうでしたか」「建物はどうでしたか」と。すると「いや、ひどい目に逢っちゃった」とか、現実が浮き彫りになってくる。ほんとに自分たちの仕事を任せられる人かどうかをそこで判断するのですね。「人」を選ぶんです。

—個人や行政が、建築家といかにいい出会いをするかということがある一方、「商品」というもう1つの違った方向、マーケティングの話がある。さすがのデベロッパーもやっとな「デザインというのが大事なのかな」ということに気がつき始めたようだね。その昔「K先生プロデュースのマンション」と名前だけで売れた時期もあったけど、結局マンションなんか、普通の奥さんでもモデルルームとか比べていくうちにだんだん目も肥えてきちゃうでしょう。僕はそういうところにごくポジティブなんだ。いわゆる、デザイナーズマンションという「僕のマンションはそういう風に呼ばれるのはいやだ」という人もいるけど、それはその昔、デザインというものをわからない人のために使っていた名残だと思う。いずれにしても「デザイン」という言葉はいろんな人に浸透し始めていて、いい方向に動いていると感じている。僕自身は、クライアントと一緒にいいものを作っていくのなら、分野は関係ない。住宅であろうが、公共であろうが、デベロッパーだろうが楽しくやるだけだよ(笑)。

「現場監理」

置鮎工業
代表取締役社長

置鮎廣海氏

今月は、金物細工の置鮎工業さんです。建築の金物細工をつくり続けて40年以上という社長は、昭和35年に就職列車に乗って九州から上京してきた、まさに「金のたまご」。日本の高度経済成長期を支えてきました。10年の文通交際を経て結婚したという奥様は、辰でも評判の元気印。経理を担当されて、夫唱婦随で歩み続けています。浦安の工場事務所で辰の細山田工事部長と話を聞きました

—T邸の螺旋階段、精度がいいと現場で評判です。

置鮎：自分はものをつくる人間でしょ。うちの若い連中には「自分がお客様の立場だったらどういものがほしいか」といつも言うんですよ。こちらで作ったものの後に、後から大工さんがまた木を張り込むわけだから少々の曲がりも許されない。「自分が作って、お金をもらえばいい」というものではないんですよ。

奥様：真面目な人でしょう。「技術だけは自信がある」と自負しています。

置鮎：大手のゼネコンさんとも付き合いがあるけれども、細かいことを言えば、仕事の総量は減ってきましたね。

奥様：それも重なるときには重なるもので、バランスよく順番に来てくれるといいんですけどね(笑)。

細山田：それはうちも同じです(笑)。

置鮎：でも最近、意匠ばかり凝る設計事務所が増えて、住む人のことを考えていないなどあきれることもありますよ。階段1つにしても、とても角度が急だったりして、もっと「丈夫で長持ち、使いやすく」ということを考えた方がいいと思いますよ。

奥様：それから予算や納期が決まっているのに、変更や追加を次々と出してくる設計の先生もいてね。材料も発注済みで、最終的に納期が間に合わないで延滞金を取られるのはこちら。もう大変です。

置鮎：あまりひどいときには、辰さんの主任さんにも「書面作って設計屋さんから質疑事項にきちんと印鑑もらわないとだめ」とつい言ってしまいます。

細山田：きちんものを言う主任もいますけど、なかなか難しいですね。

—設計の先生は、現場を見にいらしゃいますか。

置鮎：来る人は来るけど、施工手順がわかっていない先生もいますよ。



工場にて：後列左から1人目が+置鮎社長、前列左端が奥様。

少しはわかってほしいときがあります。無理な追加や変更は業者が困る、現場主任も困る、結局建て主さんに金額が跳ね返る。それから現場の定例会議も、設計者と必要最低限度の業者だけでなく、大手のゼネコンだとすべての業者を2週間に1度参加させたりする。最終的な工程を理解して、自分の仕事だけでなく次にどの業者さんがどのタイミングで入ってくるか、頭に入っているのとないのでは違うからね。

細山田：大手の大きい現場は業務を別にやる人間が配置されていますからね。そうしないと大変だし。

置鮎：業者にレポート出させたりして、あまり程度の低いところは出入り禁止になるね。

細山田：うちでは、なかなかそこまで管理できないと思いますが、下請の業者さんが優秀だから、仕事が頂戴できているとほんとに思っていますよ。あとは早目の図面、発注ですよ。

置鮎：結局、建築って最後にそうなっちゃうんですが、少しでも早く作業するのがいい。土日仕事になってしまう。そうならないように、がんばらなくちゃね。

—今後ともご指導よろしくお願ひします。(この後いただいた辰の主任に対する率直なご指摘を、社内の反省材料にしました。)

TOPICS/INFORMATION

IKE7914 新築工事 上棟式 1月15日 大田区

1階をダンス室としたシンプルな空間の住宅です。部屋の仕切りの高さは2mに抑えてあり、一つながりの天井が広がりをもたらしています。

構造：RC造 地上3階
用途：専用住宅
設計：桑原聡／桑原聡建築研究所
完成予定：2005年4月



N邸 新築工事 地鎮祭 1月25日 新宿区

北側のみが開けている建込んだ敷地。大開口部を南北に取り、閉塞感を取り除き、天窗につながる吹抜けや螺旋階段により光や家族の気配が伝わります。

構造：RC造 地上3階
用途：専用住宅
設計：荒木毅建築事務所
完成予定：2005年7月



新入社員が入りました。 2月1日

以前ShinClubでも募集のお知らせをしましたが、このたび2004年度の中途採用者を決定しました。

2月1日付けで入社したのは、以下の5名です。20代の若さ溢れる面々です。

寺田智行(工事部)、岩本健寿(工事部)、渡邊晃久(工事部)、小橋潤一(工事部)、江崎朝子(営業部E&Dチーム)

施工中の現場を一通り見学した5人の感想は、いずれも「早く一人前になっていい仕事ができるようになりたい」という希望にあふれたものでした。現在は配属も決まり、先輩に一人から仕事を教わっています。まずは現場の厳しさを学ぶことになりそうです。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

編集後記

・E&Dチームの谷貝の現場日記：M邸改修工事の初日。壁・天井の解体作業中の現場で突然、足裏に激痛が…。落ちていた釘をうっかり踏み抜き、靴底を釘が貫通したのです。社に戻ってからこの話をしたら、周りから一斉に「かなづちで足の裏をたたいておきゃいいんだよ」というアドバイス(!?)。これは、感染症を防ぐため「皮膚の奥の血をきちんと出せ」という昔からの大工さんの言い伝え、現場の常識なのでした。「早く安全靴を買ってもらおう」とひそかに願ひ谷貝でした。